サハリン発見「アイヌ鎧」の年代について

梶原　洋

The new assumption of the date of the so-called “Ainu armors” from Sakhalin

KAJIWARA Hiroshi

キーワード：北東アジア　アイヌ鎧　前合わせ式　巴文　松皮菱文　縄目縅

要旨

1933年に伊東信雄により樺太で発見された2領のアイヌ鎧は、主としてその構造が古墳時代の挂甲に類似していることから、平安初期（9世紀）の所産と推定されていた。しかし、11から12世紀に生まれ、鎌倉時代以降に盛んに用いられた「腹巻鎧」との構造的な類似性をもつと推定される。そして、鎧自体の特徴は、北東アジアのチュクチ族などの前合わせ式鎧と共通していて、その伝統に倣った上で、日本式鎧の縄目縅、菱縫などの製作技法を取り入れて作られた可能性が高い。また、サハリンに残されたアイヌ鎧に見られる巴文が、南北朝以降の型式であり、新たに確認された松皮菱文は、武田氏に関連することから、15世紀に蠣崎氏（武田氏）を中心とした道南の和人勢力とアイヌ民族との間で繰り広げられた戦いとの強い関連も推定される。したがって、この鎧は、平安時代9世紀の所産ではなく、室町時代の15世紀頃に奥州以北などで製作され、サハリン（樺太）にまでもたらされたとの説明が最も有力となり、従来の年代感は訂正されなくてはならないだろう。

Abstract

Two unique works of lamellar armors made of hide have been preserved individually at Tohoku University in Sendai and at a regional museum in Yuzhno-Sakhalinsk, Russia (fig.1,6). They were originally found by and purchased from a Karafuto Ainu family by the late Professor Itoh Nobuo in 1933. One of them was transported to Sendai and another one remains in Sakhalin. Suenaga Masao and Itoh pointed out that the armor shares common structural characteristics between the Karafuto armors and the Keiko armor (front fastening iron lamellar armor). That was originally excavated inside the Kofun (Tumuli) as grave goods after the 5th century. Based mainly on this feature, both scholars dated the Ainu armor back to the early Heian period, i.e. the 9th century as a remnant example of Keiko tradition.

However, I have recently noticed a critical resemblance in structure between Japanese Haramaki armor (in reversed wearing), that appeared around 12th century, and Ainu armors (fig.7). As Suenaga and Itoh had already referred, front alignment structure was common among armors of Eurasian ethnic groups including the Ainu (fig.2, 3) (Suenaga and Itoh 1979). Aa a result, the Ainu armors display both traditions, front aligning structure derived from Eurasia and lacing techniques for Lamellae as Nawameodoshi (oblique lacing) or Hishinui (cross lacing) (fig.4). The front and dorsal plates are equivalent to those of the Haramaki cuirass in reversed position of Japanese origin (fig.7). Additionally, the counterclockwise Tomoe crest on Sakhalin armor resembles the style of Nanbokucho period or Early Muromachi period (14-15th century) (fig.5 lower). The Matsukawabishi crest of the famous Takeda family (fig.5 upper) is supposed to relate to lord Kakizaki (Takeda), who governed Southern Hokkaido in the 15th century and fought brutal battles like the Koshamain war with Ainu people. Considering the above-mentioned factors, I conclude that the Ainu armors were manufactured at the time of around the 15th century by Japanese rural artisans imitating the front strapped armor style of Northern Eurasia using Japanese yoroi armor manufacturing techniques at Northern Honshu or Southern Ezo (present day Hokkaido) for gifts or trade goods to Ainu groups sympathetic to the Wajin Japanese.

はじめに

ロシア共和国、サハリン州ユジノサハリンスク（旧豊原）市のサハリン郷土博物館に所蔵されている「アイヌ鎧」については、伊東信雄が昭和8（1933）年8月22日、旧日本領樺太東多来加の東万吉方で発見し、購入した2領のうちの1領であり、発見の経緯とともによく知られている。日本に持ち帰られた鎧は、現在東北大学考古陳列館に所蔵（以下資料Aとする）されており、後に末永雅雄と伊東が詳細な分析を発表した（末永、伊東1979）。一方、ユジノサハリンスク博物館の資料（以下資料Bとする）については、末永・伊東の研究で触れられているものの、それ以上の詳しい研究分析がないまま現在に至っている。近年、筆者は、「小札」の形態と縅穴の配置から型式分類をし、それに基づいた甲冑の分析を行い、ユーラシアの中での日本の甲冑の位置づけを試みてきた（梶原　2009、2018）。そのなかで、アイヌ鎧については、末永らも指摘したように、「挂甲」のような前合わせ式という構造的特徴が、チベット、モンゴル、中国、契丹、チュクチなど北東アジアの諸民族の鎧と共通していることが明らかである。また、近年になって、サハリンのアイヌ鎧について、東北大学総合博物館前館長の柳田俊雄教授から、ユジノサハリンスク郷土博物館で撮影した写真一枚を恵贈された。筆者は、甲冑小札の研究を進める過程で、これまであまり注目されていなかった特徴に着目し、製作年代について新たな見方を提示するために、今回の論考をまとめた。また、今回新たにサハリン教育大学の畏友アレクサンドル・ワシリエフスキー教授に正面からのカラー写真のデータを送っていただいた。記して感謝もうしあげたい。

1　アイヌ鎧の研究史

伊東により紹介されたアイヌ鎧（資料A）については、『挂甲の系譜』の研究に尽きるといえる（末永、伊東1979）。この鎧についての末永、伊東の結論は以下の通りである。

p.134

①「平安時代にしばしば東北鎮撫の軍隊を送った際に使用した革札製の挂甲が、たまたまアイヌの手に渡って保存

資料A

資料B

図1　上　東北大学所蔵アイヌ鎧、
　　下　ユジノサハリンスク郷土博物館所蔵、アイヌ鎧
図1下左.サハリン教育大学　アレクサンドル・ワシリエフスキー氏提供、右.東北大学総合博物館　柳田俊雄氏提供
Fig.1 Upper; Ainu Armor of Tohoku University (By the courtesy of Tohoku University, department of archaeology.
Lower; Ainu Armor of Sakhalin Regional Museum
(By the courtesy of Professor Aleksandr Vasilievskii and Sakhalin Regional Museum; left and Professor Yanagida of Tohoku University museum; right)

された」

②「この挂甲型式が古墳出土の胴丸式挂甲様式をそのままに伝え、時期的には正倉院宝物に次ぐものと推定」し、「おそらく平安時代に製作されたであろう革札の挂甲制式を示すものと考えたい」

③年代的には、平安時代初期、8世紀末から－9世紀末の100年間、つまり延暦・元慶（782-884）年間で、特に弘仁6年（815）の蝦夷征討と関連する。

以上が末永・伊東のアイヌ鎧に関する結論であり、アイヌ鎧を平安時代前期からの伝来資料とした。また、同時に資料B、サハリン郷土博物館のアイヌ鎧についても、伊東は、次のように記している。「私自身もこの挂甲については、管見しただけであって詳しい調査記録を持たない」としながら、写真をもとに（金田一、杉山1941;p.161挿図二五）①東北大学所蔵鎧と同じく、前面に引き合わせのある胴丸式挂甲である。②竪上第一段が、東北大学の資料は、菱縫で押付板に綴じ付けられているのに対し、革緒で取り付けられている。③小札の縅には、大鎧成立以降の縄目縅が用いられている。④縅革の帯が東北大学のものより一段多く、11段となり丈長である。⑤背面の押付板がより大きい。⑥前面の胸板と背面の押付板に三つ巴文があり、平安時代後期から鎌倉時代にかけての古式の巴文であるとの見解を示し、日本の古代の挂甲との強い関わりを想定している。⑦巴文は、平安時代後期から鎌倉時代初期のスタイルである。

吉田は、これに対して、「アイヌ鎧は、貂の皮」として、素材の違いを強調するとともに、「日本からアイヌに輸出した」とする説を批判し、ユーラシアの視点から再検討を求めた（吉田1966;p.30）。さらに資料Aについて縅方などを詳しく分析し、山丹交易により、もたらされたとの説を展開した（吉田1967:p.30）。

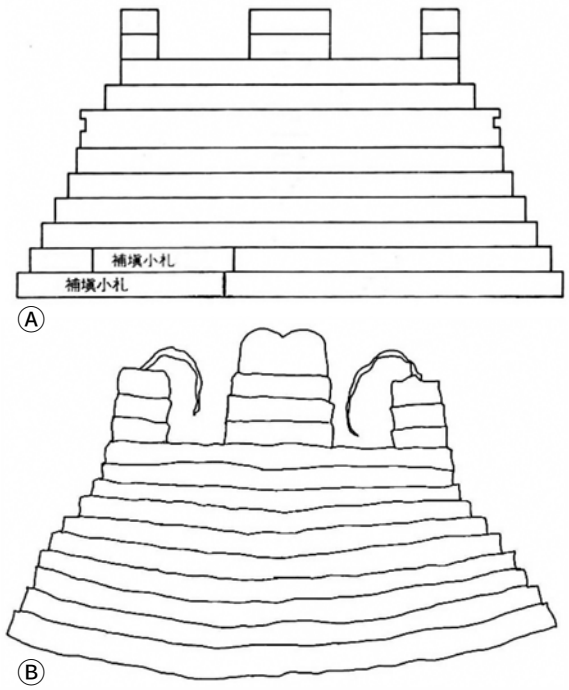
2　サハリンアイヌ鎧（資料B）の外観と資料Aとの比較

構造的特徴として、伊東の指摘も合わせて次のようにまとめられる。ただ、筆者も実見していないので、詳しい計測データ、小札形状の分析などはない。①東北大学資料と同じく前合わせの挂甲鎧である。②縅革の列では11段、小札の帯数でいうと12段あり、東北大学資料より1段多い。③前面の胸板、背部の押付板とその下の小札列が縅革により取り付けられている。④胸板の形状が首の部分の隅を斜めに切った長方形であり、資料Aの形状とほぼ一致する。⑤押付板の形状は背の部分を大きく覆うような長方形で、資料Aのものよりも大きい。しかし、その形は、縁取りの

図2　チュクチ族の鎧
Fig.2 Armor of Chukchi

菱縫などの位置を除き、ほぼ同じである（金田一、杉山1941, 1993、P.161図25）。⑥胸板と押付板に左回りの三つ巴文が描かれ、脇板には、松皮菱文と考えられる文様が描かれている。これまで三つ巴文の存在は指摘されていたが、脇板の文様は、注目されてこなかった[i]。末永・伊東が、正倉院所蔵の小札鎧残欠に次ぐものと主張しているが、小札の型式が正倉院は、中央に縅穴が位置する、梶原分類のⅠ類であるのに対し、東北大学の資料Aは、概ね大鎧の小札と等しくいわゆる2行13孔の縄目縅用の並札の範疇に入るものである。

構造について見ると　チュクチ、コリャークなど北東アジアの鎧やチベットの革鎧は、サハリンの鎧と同様に、前合わせ式の挂甲で、開くと末広がりになる（図3）。胸板、押付板と下の小札帯が、縅革（革緒）により連結する型式であり、資料Aが胸板などと小札帯を菱縫で縫い付ける構造である点が、異なっている（Jochelson 1997, p.101 fig.53-54, 梶原2009; p.63図1-2,4, Bororaz,2011; P.97100, Kendall 1997; p.40）。また、チベットの皮鎧は、押付板の下部に小札帯が3段、胸板はないが、その部分は3段の小札帯からなり、押付板と下の小札帯は、革緒により連結されており、サハリンの鎧と共通している（La Rocca 2006; p.124-125）。チュクチ、コリャークでは、この鎧にさらに、後方からの矢を防ぐための羽状の防御板が背部に取り付けられるが、その形は、スキタイの時代のものに類似している（図2）（Minzhulin 1988,）。東北福祉大学芹沢銈介美術



	Ⓐ 末永・伊東 アイヌ挂甲	Ⓑ ラロッカ チベット皮鎧
立場1	6-13-6	7-19-9
立場2	6-13-6	8-15-8
立場3	なし	11-18-8
一段	54	74
二段	59	63
三段	67	78
四段	68	65
五段	71	71
六段	75	79
七段	79	76
八段	106(補修のため小札幅狭い)	71
九段	120(補修のため小札幅狭い)	69
十段	なし	66

アイヌ鎧とチベット鎧の構成と小札数

図3　前合わせ鎧の扇状構造
Fig. 3 Fan-shaped structure of the front strapped armor
A. Tohoku University Ainu armor (specimen A), B. Tibetan hide armor.

工芸館の所蔵するチベットの鎧[ii]、サハリンアイヌ、チュクチ、コリャークの鎧では、広げると前合わせで末広がりになる構造は共通するが、胸板、押付板を具備するのはチュクチ族やコリャーク族とアイヌの鎧にだけ見られ、中には、押付板を前面（逆）にして着用している例も存在する（Thordeman B.1939, 図 251, Nefyodkin 2003, p.69 図

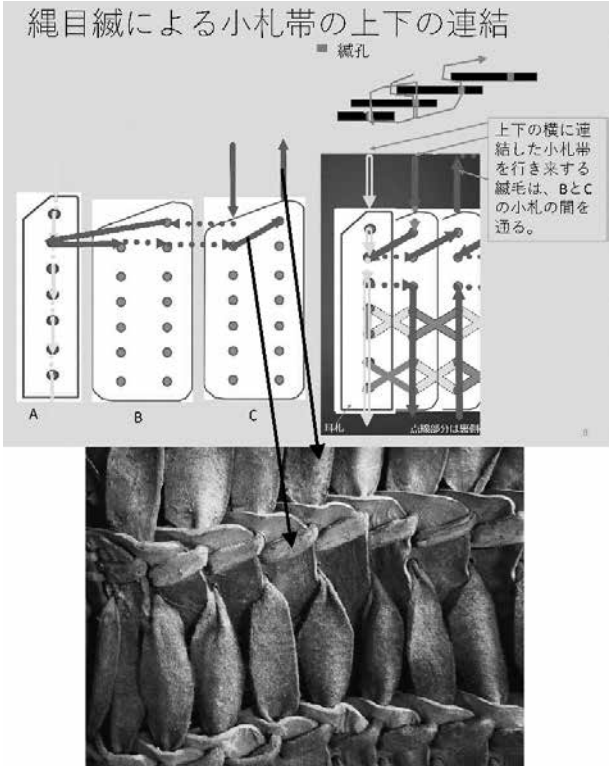


図4　資料Aの縄目縅
Fig.4 Oblique lacing (Nawame-odoshi) of Specimen A

梶原　2009　図1）[iii]。これまでの調査から、コート式で前合わせの鎧は、ユーラシア大陸に広く分布し、前述のチベット、モンゴルなどにみられ（La Rocca 2006, p.63-65, 梶原 2009, 魏兵20011,p.235-241）、基本的には馬に乗る遊牧民の戦士の鎧と考えられる。しかし、前後に胸板と押付板を備えた鎧は、チュクチ、コリャークでは、歩兵の鎧であり、さらにこの北東アジア、サハリン、北海道にのみ見られる点に注目したい（梶原　2009）。

このように東北大学資料Aとサハリン資料Bは、細部を除いて、前合わせ式鎧であるという点で、ほとんど構造に変化はない（図1）。この鎧について、前述の末永・伊東らの研究では、古墳時代以降の挂甲鎧として、直接の関係を説いているが、開いた形が末広がりという構造は、近代までのチベットから北東アジアの鎧と同じであり、必ずしも奈良から平安時代の挂甲に直接結びつける必要はない。小札の縅方は、大鎧完成期以後の縄目縅であり（図4）、古式大鎧で用いられたと考えられるⅡ類の四つ目札を用いた縦取縅や、さらにそれより古い8世紀と考えられる正倉院残欠のような中央に縅孔のあるⅠ類の札による縅ではない（梶原　2009, 2018）。使われた（小）札は、左上の縅穴の欠如する（縄目縅のため）二行13孔の並札に類似するものを用いている点は、日本の平安後期以降の鎧からの強い影響

図5　松皮菱文と巴文
Fig.5 Family crest on specimen B armor of Sakhalin Regional Museum
Upper left; Matsukawahishi crest on specimen B, right; current matsukawabishi crest.
Lower left; Counterclockwise Tomoe crest of specimen B., right; clockwise Tomoe of Henmyoin drum (Usui 2011) (Usui 2011)

を見て取ることができる。二行13孔の並札による縄目縅は、秋田城出土小札の発展形である二行14孔の四つ目札からのは改良であり、12世紀ごろに成立したと推定される（梶原2018）。したがって、その点から見ても縄目縅による資料Aが、それ以前である可能性は、極めて低い。

3　サハリン郷土博物館所蔵鎧（資料B）の文様について

資料Bには、東北大資料にはない胸板と押付板に描かれた左巴文と脇板の松皮菱文[iv]があり、その文様から検討を加える。

(a) 菱文について（図5上段）

菱文は通常武田氏の文様として扱われることが多い。三段の菱文は、前述のように中央の大きい菱の上下に小さい菱が連なる構造でいわゆる松皮菱文とみなされる。15世紀後半、応仁の乱頃成立したと推定（秋田1995）されている『見聞諸家文』では、松皮菱文は武田氏の家文として記載されており、源頼義から義光に伝えられたといわれている。その書では、松皮菱とその隣に四つ割菱が描かれ、下に次のような記述が見られる。

「武田　頼義男新羅三郎義光之末孫　従四位下伊予守　鎮守府将軍　童名千手丸
永承五年後冷泉院依勅奥州安倍頼時ヲ攻是時詣住吉社祈平復夷族干時有神託旗賜一流鎧一領　（中略）　御子香良大明神之鎧袖也此裙之文割菱也　（中略）　新羅三郎義光雖為季

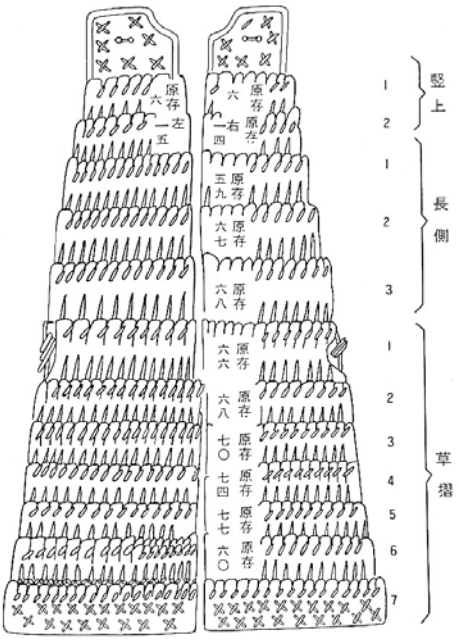


図6　アイヌ鎧の構造(吉田1967)
Fig.6 Structure of Ainu armor
(Yoshida 1967)

子依父鍾愛傳之即旗楯無是也旗者白地無文鎧松皮菱（下線は筆者）有　以下略」

松皮菱というデザイン名の由来について、丹沢は、平安末期と推定されている『作庭記』との関連を論じた（丹沢2002;51-73）。松皮菱文がどこまでさかのぼるのかについては、松山によれば、12世紀後半の「伴大納言絵巻」に描かれた応天門で逃げ惑う庶民の袴の柄が最古と考えられる（松山1994）。通常、松皮菱が中央の大きな菱に上下の小型の菱と重なって描かれているが、本資料Bの松皮菱文は、中央の菱が上下の菱のよりもかなり大きく、しかも上下の小さい菱は、中央の菱と重複せずに尖端で接しているように見受けられる。すでに12世紀後半の『伴大納言絵詞』中の松皮菱文は、現代の形と同じなので（黒田1991;p.16朱雀門で逃げ惑う一人の男の袴文様、松山1994）、すでに平安時代後期には現在と変わらない松皮菱文が用いられていたことがわかる。その点から見ると、本鎧の松皮菱文は、特異な構図を持ち、なぜ本来の松皮菱文の構図と違うのかという、疑問が生ずる。一つは、この松皮菱文は、さらに時代を遡るという可能性、第二には、都で用いられていた松皮菱文を知らなかったという可能性が考えられるが、この点については不明とせざるを得ない。

(b) 松皮菱文と武田氏、蠣崎氏

松皮菱文について考察する際、やはり、蝦夷と深い関わりをもつ蠣崎氏と武田氏の関係について触れる必要がある。15世紀中頃、武田信広が蠣崎氏を継いでいるが、これにつ

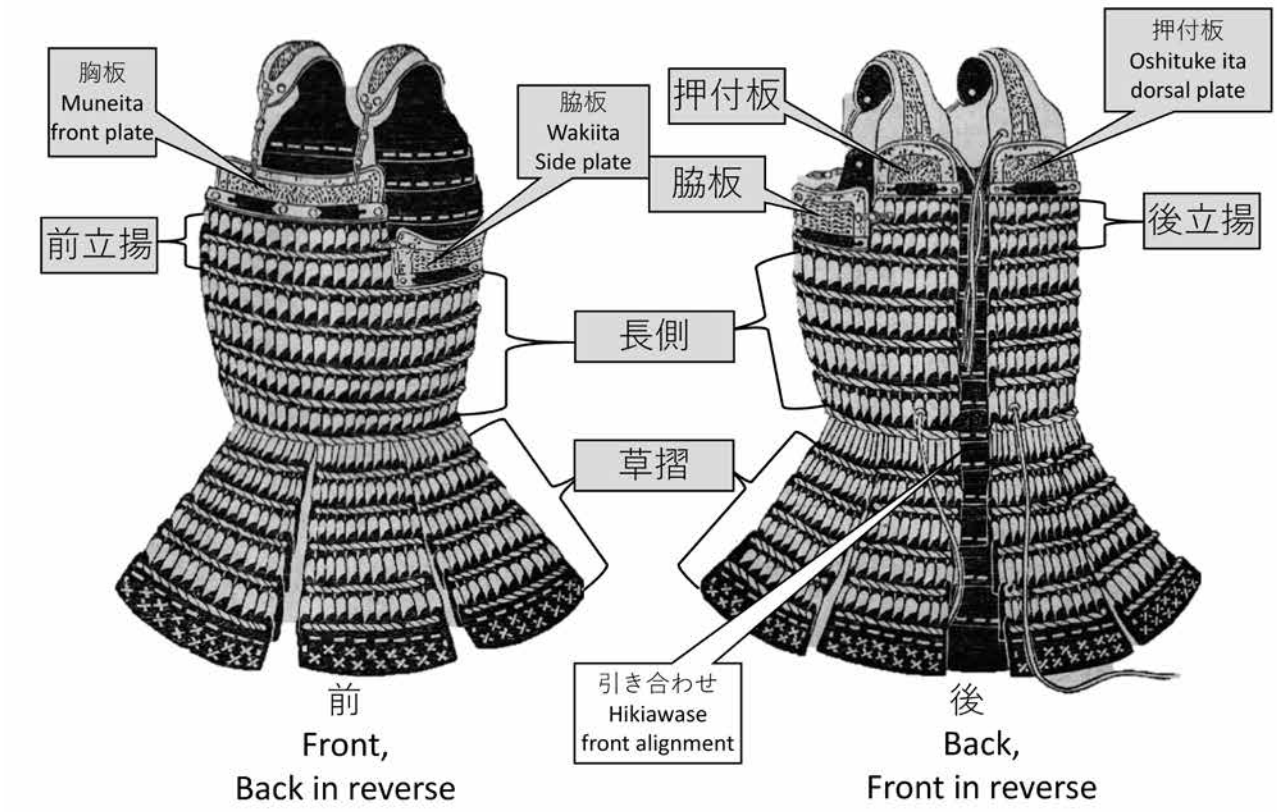


図7.　腹巻鎧、(内藤、平井1907　圖5より)
Fig.7 Haramaki Armor of Medieval age Japan (Naito and Hirai 1907 fig.5)

いては、さまざまな説がある（松前景廣著、木村訳　2013、福島町史第二巻1995）。コシャマインの戦い（1457-1458康正・長禄の戦い）の際、コシャマインの勢力により道南十二館が次々と攻め落とされ、下之国館（茂別館）上之国館の二館を残すのみとなった敗勢を、上之国館に在館していた若狭武田の一族である武田若狭守信広の活躍により勝利したという伝説が載せられている。信広は、後に蠣崎季繁の嗣子となり、蠣崎氏を継いだ。福島町史の中で、武田信広は、①下之国安東太政季とともに、宝徳三（1451）年、蝦夷地に渡った。町史によれば、信広の出自は若狭守護武田信賢の嫡子という説、②信広は、下北半島糠部脇野沢村の蠣崎を根拠とし、南部氏と戦った蠣崎蔵人信純が戦いに敗れ、蝦夷地に逃れて武田若狭守信広と名乗ったとの説、③岩手県立図書館所蔵の『清私記』を引いて、信広は南部氏の一族であるという説も載せている（福山町史1995第二巻第二節 ）。さらに、近若狭守信広は武田中務信高の長男であるとの新説も紹介しているが、その出自については、不明な点が多いと結論づけた。一方、入間田は、信広が若狭の武田出身であるということ自体を「フィクション」とみなしており、その出自については様々な疑問もある（入間田2003）が、武田氏と何らかの関わりを持つ人物であることに問題はないであろう。当該鎧の松皮菱文と蠣崎(武田)氏との直接的な関わりを示すデータはないが、巴文からみて室町初期の可能性が高いとするならば、1456年に始まるコシャマインの戦いや1511年まで続くと言われるアイヌ民族と和人との長い抗争の中で、アイヌ鎧が製作された可能性も疑われる。

(c) 巴文について（図5下段）

巴文については、平安以降、瓦などに広く用いられている文様であり、特定の氏族と結びつけることはできない。本鎧の巴文は、左三つ巴文[v]で、中心部の頭部が独立的に丸く明瞭に描かれている。尾部は円周を反対側まで長く伸びている。巴文を分析した臼井によれば、平安期の巴文は頭部が明瞭に描き出されておらず、鎌倉以降に次第に頭部が明瞭になっていく（臼井2011; 27-38）。ユジノサハリンスク資料に最も類似した巴文は南北朝～室町時代初期と考えられる「瀬戸内市牛窓　遍明院　太鼓樽」に描かれたものである（臼井2011;34）。以上の資料をもとに描かれた巴文から見る限り、この鎧は平安時代までは遡らず、鎌倉以降もしくはより限定的には南北朝以降室町時代と見るのが妥当であろう。

結論

鎧は北東アジアの諸民族の間で、際立った宝物として非常に高い価値を有していたことが知られている。例えば間宮林蔵は、『北蝦夷図説』のなかで、「夷寶の内、ベッチと称するものあり、コルテッケ夷の製するところにして、甲冑の粗なるものなり。満州諸族また皆此れを宝とす。その製薄鉄をもって札となし、獣皮をもって是を綴り、裏に獣皮をつく。その状、図のごとく、ことに粗製にして用器となすべきのものにあらずといえども、夷中第一品の寶器となし、およそ闘争の事あるときは、酋長たるものその他富貴のものは皆、是を被（き）る」と記しているし（間宮1979;217、梶原2009）、シュレンクは、その著『1854－56年におけるアムール流域の旅行と研究』でも、「私の時代にもしきたりは別にして、この鎧は完全で、しかし、壊れた状態になっても確実にかけらが、とても価値のあるものとして手元に残されている。そしてこのことがその所有者に対して際立った富と声望による栄誉を与えた。このわずかで、妻をあがなうのに充分であるほどだ。今日めったにない古物で、仮定上の高い価値を持つものだ。それは外国起源であることによるのだが、ギリヤークの一致した報告では、間宮林蔵を引用すると満州に由来し、それゆえにそれ自身重んじられている」（Von Schrenck 1891;572-573）と述べた。シュレンクの鉄鎧の小札の型式は、中国東北部から沿海州、朝鮮半島などに分布し、8世紀の秋田城の二行16孔の小札とも関連する、二行14－18孔の小札であり、12世紀頃の女真の時代製作の可能性もある資料である（梶原2009，2018）。本州からもたらされた和式の甲冑以外のアイヌ民族の鎧は、残された図や記録（チースリク1962、間宮林蔵1855など）などを見ても左右の胸板と背部の高い押付板を持つ前合わせ式の小札鎧が多い（末永・伊東（1979）図39、梶原2009、図1）。鎧については、ユカラでも、神のごとき英雄の華麗な武装の姿として描かれていることからみて、アイヌ民族においても他の北東アジアの諸民族と同様、際立つた宝物であった（関根2014）。

家文から判断すると当該アイヌ鎧は、15世紀以降と推定される。さらに構造的には、前面の両側に左右に胸板が付き、背部の後頭部の下まで押付板が伸びている（図1、図7）。前述のようにその下に並札類似の小札帯が縄目縅により上下に縅される（図4）。前述のように、このような胸板、押付板をもつ前合わせの挂甲式鎧は、極北のチュクチ族・コリャーク族などの鎧には見られるが、コート状前合わせ式のモンゴル、契丹、女真、チベットなどの鎧には見られない（梶原2009;図1）。アイヌ鎧のこの特異な構造は、チュクチ族、コリャーク族など北東アジア諸民族のもつ前合わせの鎧と同一の伝統に属すると考えられる。反面、札の縅穴の型式と縄目縅による製作方法は、日本の伝統的鎧製作法と共通する。前述のように、この鎧を古墳時代の挂甲からの伝統にもとめることは、家文の型式から見ても無理がある。日本の鎧のなかで類例を探すと、前合わせ鎧の胸板や押付板は、大鎧と同時期、平安後期12世紀前半ごろ成立と推定される（近藤2000）日本の腹巻鎧を、前後を逆にして、引き合わせ部分を前にした構造との強い類似に驚かされる（図7）（内藤、平井1907、近藤　2000，笹間　2007など）。アイヌ鎧の独立した前面に位置する二枚の胸板は腹巻の背中にある両側の部品（図7の押付板）が前に来た形状と一致し、背面を防御する部分は腹巻鎧の前面の小札と連結する最上部（図7の胸板）に対応し、それが上に拡張したものと考えることができる。ただし腹巻きでは別れている草摺の部分が連続しているのは、北東アジアの鎧の構造に倣ったためと推定される。北東アジアの諸民族の場合、前合わせの挂甲状の構造が一般的であり（図2）（梶原2009;図1 p.63, p.67）、さらに背部に防御具を付け足す場合もあって、日本の鎧が前面を主に防御対象とするのとは異なり、背後からの攻撃に対する防御を極めて重視する構造となっているという点（梶原2009;図1）においても、アイヌ鎧と北東アジアの鎧との強い共通性が伺われる。アイヌ鎧の前合わせ挂甲式構造は、背部防御を主とした北東アジアの鎧に倣ったためと考えられる。しかし、一方で日本的な縅しや綴の製作技法や細部の仕様に共通点があるということから、両方の文化的な影響を受けた折衷的あるいは融合的な構造と考えることができる。すでに述べたように、文様の点からも左巴文のスタイルは正確で、室町初期頃とみなされる。一方、松皮菱文のスタイルは不正確（一般的でない）だが、15世紀の道南の和人集団の蠣崎氏（武田氏）と関わりが疑われる。これらのことを考え合わせると、大陸の鎧がサハリンに持ち込まれたのではなく、奥州もしくは蝦夷地の地方甲冑師の手により、大陸の前合わせ式鎧の構造に倣って15世紀頃に製作され、それがサハリンのアイヌ集団にまでもたらされたという可能性が高い[vi]。鎧の移動の背景については、これらの鎧が、和人の勢力から協力的なアイヌの集団への一種の贈り物だった可能性も指摘しておきたい。大鎧の成立でも論じたが（梶原2009，2018）、日本固有と考えられてきた甲冑の成立や変化にも、大陸の影響を看ることができ、本州北部もしくは蝦夷地の資料については、文献史料には残らないユーラシア東部における人と技術の通底的交流が

存在したことを、視野に入れる必要があるだろう。

引用・参考文献

秋田四郎　1995 「「見聞諸家文」群の系譜」、弘前大学國史研究. 99, p12-35

入間田宣夫　2003 「中世北方史―『新羅之記録』を脱構築する―」、普及啓発セミナー東京会場21-28、アイヌ民族文化財団

臼井洋輔　2011 「安養寺所蔵 岡山県指定重要文化財「陣太鼓」の基本的・時代的特徴と文様復元」 文化財情報学研究　第８号, 11-45、吉備国際大学文化財総合研究センター

笠間良彦　2007『日本甲冑大図鑑』、柏書房株式会社

梶原　洋　2009 「小　札　考―ユーラシアからみた小札鎧の系譜―」、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館研究紀要1、57-80.

同　　2018 「小札後考－小札から見た大鎧の成立についての試論－」、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館研究紀要9、49-57.

金田一京助　杉山寿栄男　1941（1993復刻）『アイヌ藝術』（服装篇、木工篇、金工･漆器篇合本）、北海道出版企画センター

黒田泰三　1991 『新編名宝日本の美術12，伴大納言絵巻』、小学館

近藤好和　2000『中世的武具の成立と武士』、吉川弘文館

関根達人　2014 「アイヌの宝物とツクナイ」、弘前大学人文社会論叢、人文科学編（32）, 1-26

新日本古典総合データベース2000『見聞諸家文』、国文学資料館鵜飼文庫200020359
http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200020359/viewer/8

末永雅雄、伊東信雄　1979 『挂甲の系譜』、雄山閣

丹沢　巧　2002 『古来の文様と色彩の研究』、源流社

チースリク, H. 編　1962 『北方探検記―元和年間に於ける外国人の蝦夷報告書』聖心女子大学カトリック文化研究所　吉川弘文館

内藤耻叟、平井頼吉　1907 『参訂　保元物語註釈全』、東京書林

福島町史編集室　1995 「康正・長禄の蝦夷蜂起」、北海道福島町史　第二巻第二編第二章第二節

松山弘範　1994 「平安絵巻にみる庶民の文様と染色技法」、新潟青陵女子短期大学研究報告　第24号　9-20

松前景廣著、木村裕俊訳　2013 『新羅之記録』、無明社

間宮倫宗　1979（安政2年1855刊）『北蝦夷図説』名著刊行會

吉田幸平　1967 「アイヌ鎧考1」 甲冑武具研究第11号　23-30

同　　1967 「アイヌ鎧考2」 甲冑武具研究第12号　25-31

Bogoraz, V.G., (Богораз, В.Г.) 2011 “Чукчи, Матерьальная культура, Книжный дом «ЛИБРОКОМ», “Chukchi, material culture”

Delyukin, A.V. (Делюлькин, А.В.) 2014 Пацири серии грушевская/ ак-дуран. Проблемы гетезиса хронологии, Воинские тращиции в археологическом контексте: от позднего латена до позднего средневековая, Тула «Кудиково поле». “A series of armors Grushevskaya/ ak-duran”

Jochelson, W. (Ёхелсон, В.) 1997 “Коряки, Материальная культура и социальная организация» Перевод с Английского. Наук. “Koryak, material culture and social organization”

Kendall, L., Mathe, B., and Ross Miller, T., 1997 “Drawing shadows to stone, The Photography of the Jesup North Pacific Expedition, 1897-1902” American Museum of Natural History, New York.

Minzhulin, A.I. (Минжулин, А.И.) 1988 “Зашитное вооружение воина-лучника 5-4 до н.э. из кургана у села Гладковщина (реставрация и научная реконструкция)”, CA. 1988-4, 116-126. «Defensive instrument of archeriers B.C. 5-4 from Kurgan at Gladkoschina village”

Nefyodkin, A.K. (Нефедкин. А.К.) 2003 “Военное Дело Чукчей, Середина XVll－ Начало XXв,” «Warfare of the Chukchi in the mid-17th －early 20th century » ПВ. St. Petersburg

Thordeman, B. 1939 (New edition, 2001) “Armor from the battle of Wisby 1361”, originally published by ALMQUIST & WIKSELLS BOKTRYCKERI A.B.,

Von Schrenck, Leopold 1891 “Reisen und Forschungen im Amur-Lande in den Jahren 1854-1856 im Auftrage der Kaiserl. Akademie der Wissenschften zu St. Petersburg”

Wei Ping, 2011 “Illusrations for weapons and armors of China” Zhong Hua Shu Ju, 魏兵　2011 『中国兵器甲胄图鑑』 中華书局、

註

i　脱稿後、大塚和義氏が1985年の季刊『民俗学』33号の「北方少数民族の世界－ソ連邦サハリン州郷土博物館の展示」36-43で菱文についてすでに紹介されていることを知った。ここに追加訂正したい。

ii　これと酷似したメトロポリタン美術館のチベットの革鎧の年代は、1440－1640年と測定されている（La Rocca 2006, p.124 note2 .誤差を2倍にした年代幅）。

iii　つまり、サハリンアイヌの鎧を逆にして、背中に合わせ目が来る着方で、日本の腹巻鎧と同様であろう。小札の縅かたは、図では縦取縅であり、縄目縅ではない。

iv　松皮菱文については、伊東も末永も記していない。

v　巴文の左右の呼び方は、『見聞諸家紋』の宇都宮氏の巴文の記述による。http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200020359/viewer/9

vi　Bogoraz 2011; p.97fig,85には、日本製の甲冑（江戸期のものと考えられる）がチュクチ族からの購入資料として載せられている。筆者もかつてシベリア中央部のエニセイ河上流のクラスノヤルスク郷土博物館で日本製の槍を実見した。日本製の武器がシベリアの奥地まで到達していた証拠である。

（梶原　洋・東北福祉大学教授）